

リングリング
プロジェクトを
訪ねて



RING!RING! プロジェクト

地方自治体が開催する競輪・オートレースの売上金の一部は、
モノづくり、スポーツ、地域社会への貢献など、
さまざまな分野の事業に役立てられています。



Illustration by Noriko Yamaguchi

三味線、太鼓、鼓や鉦を自在に扱い 地域の伝統芸能を受け継ぐ子どもたち

徳島県小松島市立江町。青田が広がる穏やかな田園風景の中に住宅地が点在する。夜7時前、ふれあいセンター1立江の和室に40人余の子どもや大人が集まってきた。立江小学校の「祇園ばやし伝承教室」に参加している児童と、立江八幡神社祇園ばやし保存会の人々。週に1度の祇園ばやしの練習日だ。

祇園ばやし400年の歴史

立江祇園ばやしは、400年の歴史を持つとされる小松島市指定無形民俗文化財。毎年、立江八幡神社の秋の例大祭に合わせて、境内に出る「だんじり」の中などで奉納される。京都の祇園ばやしや阿波人形浄瑠璃の流行とともに、京都にはな

い三味線が取り入れられたともいわれる。

ももとは地域の祭り当番が交代で奉納していたが、過疎化や高齢化で奏者が不足するようになり、昭和41年に保存会が設けられた。それでも後継者不足が続いたため、平成17年、立江小学校と立江公民館が中心になって伝承教室を始め、後継者の育成に乗り出した。

伝承教室の参加児童は、現在総勢39人。立江小学校の全校生の約3分の1と、地元保育園や幼稚園の園児たちだ。年齢は4歳から12歳まで、男女は半々。三味線に大太鼓、小太鼓、鼓、鉦は大人と同じものを使って、祇園ばやしと地拍子の2種類の曲を練習している。



和楽器の楽譜を見ながら三味線チームは真剣な表情

年々増える参加者に合わせ、JKAの支援で楽器を増やしたり、三味線の皮を張り替えたり。「このあたりは阿波踊りの盛んなところだから、子どもたちも三味線や太鼓を聞きなれている」と保存会の大人たちが胸を張る。子どもたちは上手に和楽器を使いこなし、複雑な節回しを見事に奏でている。「むずかしいのは鉦。でも一番覚えがいいから小さい子にやらせる」のだそうだ。指導には保存



これぞ祇園ばやし和楽器オーケストラ

会の大人のほか、伝承教室のOBの大学生たちも加わっている。

1年で三味線も弾ける

子どもたちは、兄弟や友達がやっているのを見て参加したり、親に勧められて始めたり。三味線を担当する小学校6年と5年の女子は口々に「弾けるようになるには習い始めて1年ぐらいかかった。節回しは難しいけど、いまは和楽器の楽譜も読めるようになった。やっていて楽しい」と話す。9月の例大祭に向け、夏休みの

後半には連日の集中練習。また、小学校の行事や近隣の民俗芸能大会などで披露する機会もある。ネットには、伝承教室の大人数による「おはやしオーケストラ」に感動したファンの感想も載っている。

伝承教室の、創設当時の立江小学校校長で、現在伝承教室の会長を務める森本利雄さんは「卒業生が伝承者になるだけでなく、指導者にもなってくれつつある。ただ大学を卒業すると、就職のため故郷を離れてしまふケースが多いのは残念」と嘆いている。



背中の「伝承人」の文字が
りりしい、そろいのTシャツ



リングリングプロジェクトを訪ねて

公益補助事業

公益社団法人 日本てんかん協会(波の会)

正しい知識と身近な情報満載 患者・家族支える月刊情報誌

病気の見えにくさ

「てんかん」は、脳の神経細胞の突発的な電気的反応で、発作が引き起こされる病気。現在では、投薬を続けることで発作をコントロールでき、ほとんどの患者は、普通の社会生活を送っている。しかし、そのために「かえって病気そのものや生活上の問題が見えにくく、患者や家族が孤立しがち」と、日本てんかん協会の古屋光人常務理事は語る。

協会によれば、2011、12年に起きたてんかん治療中の運転者による交通事故を背景に、病気を過大に危険視する傾向が強まった。学校のプールや理科実験に患者の生徒が参加を拒まれたり、会社を解雇された

りなど、病名が知られていても、病气への正しい理解が伴わなければ、いわれなき偏見や差別が助長されるという。

協会の設立は1976年。てんかんの子どもを持つ親たち、患者、医師たちが連携して、病気や治療の正しい知識の普及、療育・就学・就労の援助、社会の無知・偏見の是正などを目ざして活動を続けてきた。

現在、日本のてんかん患者数は推定約100万人。協会の会員数約5500人は「100人に1人」の発症率の割には少なく、社会の認知度を高めるためにも「めざせ！会員1万人」をキャッチフレーズに、てんかん運動の仲間づくりに努めている。

から、夜更けにまで及ぶ。

読者の心つかむ「体験談」

「てんかんと自動車運転」「どうする!? 学校選び」「きょうだいの気持ち」若いお母さん・お父さんへ……」毎号、患者・家族の暮らしに直結したテーマで特集が生まれ、ページをめくると、専門家による病気についての解説やアドバイス、参考書籍紹介などと並んで、患者や家族の「体験談」が目を引く。

協会に寄せられた相談の手紙などを手掛かりに「体験談」の対象者を選び、文字にするのは、編集委員の毎月の一仕事だ。具体的なケーススタディは、読者にとってなにより心の支えで「てんかんと私」というタイトルで、これまでに2冊、書籍としてまとめられた。

『波』はJKAの支援で毎月8000部が発行されてきたが、2013年度からは、より広い読者層を視野に電子書籍化を開始した。



病気への理解を求めて街頭キャンペーン



スマホで読める電子書籍



月刊機関誌「波」



リングリングプロジェクトを訪ねて

発熱作用生かして多彩な実用技術 化学的プロセスの小型化を目指す

目に見える光、電波、赤外線や紫外線、X線やガンマ線は、波長が異なるだけで皆同じ「電磁波」の仲間。電磁波のおかげで、テレビが見え、携帯で通話し、電子レンジで食品を温められる。この電磁波の様々な応用方法を、発熱など物質との相互作用と、化学反応や物質処理への効果を中心に調査・

研究し、情報の収集・発信、知識の普及などを推進しているのが、日本電磁波エネルギー応用学会だ。電磁波による発熱の特徴は、内部からの加熱と、1分でコップ1杯の常温の水を100℃に加熱できる迅速さと、熱する物質が選択されること。この特徴を生かし、化学、食品、医療、環境

処理などの分野ですでに実用化されるか、実用に近づいている技術は、がん細胞だけ狙い撃ちで温度を上げる肝臓がん手術、ゴムの加硫、牛乳の滅菌、レトルト食品の殺菌など幅広く多彩だ。学会の会員は200人余。研究者のほか企業関係者が4割を占め、最新の研究成果を実用につなげる役割を果たしている。また、電磁波を安全に使うための技術講習や子どもたちへの科学教育、電磁波活用のための法律整備の提案なども手掛けている。

JKAの補助を受けて毎年開かれる学会シンポジウムは、1年の研究成果をまとめて発表する場であり、研究者と現場の技術者が顔を突き合わせて話し合う場。2013年9月に東京工業大学で開かれたシンポジウムでは約1000件の発表が行われた。最新の研究のトピックには、電磁波の内のマイクロ波



による製鉄高炉の小型化や、東日本大震災で問題になったがれきり中のアスベスト処理への応用例などがあるという。学会の理事長で東工大教授の和田雄二氏は「電磁波応用の目標は、工場などの様々な化学的プロセスをできるだけ小型化すること。それによって再生可能エネルギーを利用したエコロジカルな社会システムの構築も可能になるのでは」と話す。電磁波応用の研究は、1980年代から始まったまだ若い科学。「将来は発熱作用だけでなく電磁波の『非熱効果』についても解明したい」という。



研究室での和田雄二・東京工業大学教授



リングリングプロジェクトを訪ねて

高齢化社会での自立と生活向上へ その人なりの歩行動作を補助する仕組み

加齢を原因とする運動機能の障害、ことに歩行障害は、自立した生活の妨げになるばかりでなく、高齢者の精神的健康にも影響しかねない。21世紀後半には65歳以上が人口の40%を超えると推計される高齢化社会の日本では、気軽に無理なく安心して利用でき

る歩行支援機器の開発は、社会的インフラ整備の課題の一つだ。慶応大学理工学部の村上俊之教授を中心とした研究グループはJKAの補助を受け、一人で装着でき継続して歩行動作を支援する「半装着型移動式歩行誘導機」の仕組みを開発した。

車椅子の後部に脚の動作を誘導する装置の付いた構造で、障害の程度の差異や、人それぞれで微妙に異なる歩き方を前提に、その人なりの理想の歩き方に向けて、力加減を制御して機器が柔軟にサポートしてくれる。歩行が困難になった人も、この機器を使えば転倒などの不安を抱かずにリハビリに励み、機能を回復し生活の質を向上させることが期待できるとい

ふ。福祉機器の制御などを研究してきた村上教授は「基本は人の動きをどうするか、モデル化とその表現が大事」と話す。人の動き方や力の出し方を理想の方向へサポートする今回の考え方は、スポーツの練習などにも応用できる可能性があるという。



上:歩行誘導機の試作機に脚をつなぐ
下:車椅子を押して歩くと、
脚の動きを機械がサポートしてくれる



パソコンで説明する村上俊之・慶応義塾大学教授